

平成二十二年 度 入 学 試 験 問 題

国 語

第 三 回

【注意事項】

- 一、試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- 一、問題は一ページから七ページまでです。
- 一、解答はすべて解答用紙の解答らんに記入してください。
- 一、問いの中で、字数の指示がある場合は、句読点、記号等も字数に含みます。
- 一、解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗 足 学 園 中 学 校

1 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

今の時代にはもうなくなつたと思いますが、私が子どもの頃は、とくに田舎の方では、中学校に「男子生徒は丸坊主にしなければならぬ」という校則があるところがたくさんありました。どうして中学生が丸坊主にならなければならぬのか、だれも理由は説明できませんでしたが、「ともかくルールだから守れ」という空気が当時の学校にはありました。押しつけられたり、存在意義のわからないようなルールには、反発する人もたくさんいました。それは当然です。そもそもルールというのは、私たち自身が社会のなかで自由に、より豊かに生きていくために必要なものはずです。そして、私たちにとってどのようなルールが必要かは、私たち自身で考えればよいことですから、無意味なルールに人は従順ではないのです。

民主主義の出発点は、ここにあるのです。つまり民主主義とは、その **A** に生きる人々が、自分たちにとってどのような **B** が必要かを考え、決めるしくみなのです。

学校の校則であれば、卒業してしまえば関係はなくなりません。しかし、社会のルールにはその社会で生きていくかぎり拘束されます。そして、昔はもちろんのこと、今でも国によっては、丸坊主にされる以上に理不尽なルールがたくさん存在しています。身分制度、人種・民族・性による差別などがその代表例です。歴史を振り返れば、人間の尊厳や自由は、長い間むしろ否定され、抑圧されてきました。人間の尊厳が守られ、人間が自由に生きていくためには、不必要なルールを撤廃し、新しいルールを作ることに不可欠だったのです。

民主主義がどうして必要で、どう役に立つか、身近な事例を通して考えてみます。

民主主義に対する批判の理屈として、民主主義はそこで作られるルールの正しさやできばえを保障しないというものがあります。つまり、みんなで議論してルールを作っても、それが正しいものとはかぎらないという批判です。また、こういう批判もあります。(1) **そもそも民主主義を支える市民には、自分たちにとってどのようなルールが必要で役に立つかということ**を判断する能力がないではないかという批判です。

これに似た話を、とくにみなさんは大人から聞かされることが多いのではないのでしょうか。子どもには、自分にとって何が必要か、何が正しいか

30

25

20

15

10

5

判断する力がないから、大人が決めてあげるといふ、一見すると親かな議論です。これと同じように、民主主義を批判する議論は、普通の人々には物事を議論し、判断する能力がないから、もっと賢い人、有能な人が決めてあげたほうが良いというものです。その場合の賢い人とは、昔であれば君主や貴族、今であればエリート官僚でしょう。実際、民主主義を「テキシする★**為政者**は、しばしば権力者・為政者と国民の関係を **C** になぞらえていました。

しかし、このような民主主義批判にも大きな落とし穴があります。「賢い」はずのエリートや為政者の決定が正しいものかどうか、だれがどのようにして「ハンテイ」するのでしょうか。

完璧な人間などはこの世に存在しません。一人や少数の為政者やエリートが決めても、多数の市民が決めても、間違うこともあれば、正しいこともあります。人間はすべて間違うことがあるという前提で考えれば、一人で決めるのと、大勢の議論を通して決めるのと、どちらがうまくいくのでしょうか。一人や少数の人に権力を集中し、そこで物事を決めるならば、間違つたときのブレーキがなくなります。大勢で議論して決めれば、決めるまでに手間がかかりますが、間違つたときにもブレーキがかけやすくなります。違った考えをもった人がいることが、ブレーキの役割を「ハたす」です。また、別の正しいやり方を探すことも、大勢で議論した方が容易にできます。

民主主義は、人間が長い歴史のなかで、さまざまな経験を重ねながら、獲得した政治のしくみです。人間は不完全な存在であるからこそ、より大勢の人が集まって議論をして、よりよいルールを作り出す努力を重ねなければなりません。これが民主主義を支える基本的な考え方なのです。

もちろん、ここで述べた民主主義の考え方は、抽象的なもので、実際の政治の原理をすべて説明できるわけではありません。たとえば、若い人々が主権者となって社会を構成するときには、いろいろなルールに従わなければなりません。しかし、そのルールはすべて、若い人々自身★**あ**ずかり知らぬところですでに決定されたもので、与えられたもの、押し付けられたものにすぎません。

そもそも人間は、どのような時代に生まれるか、どのような国のどのような家庭に生まれるかを選ぶことはできません。国や地方自治体などの政治のまとまりに所属することは、いわば人間にとって**選**択の**及**ばないこと

60

55

50

45

40

35

です。そして、自分たちよりも上の世代が決めたルールのなかで生きていくことも、ある面では与えられた前提、自分の意志で選択できないことです。

しかし、民主主義というしくみで世の中を形作るということは、人間が「与えられた前提」の奴隷にならないということなのです。前にふれたように、性別や人種によつて人間を差別するという秩序が「当然」であり、「与えられた前提」であるような時代が存在しました。差別される側にとつて理不尽な秩序を変えてきたのは、民主主義という「プキ」です。理不尽な秩序をおかしいと思う人が多数になれば、民主主義というしくみを使ってそれを作りかえることができるのです。

民主主義の理念と現実の間には、もう一つの大きなズレがあります。それは、「私たちが決める」という理念と、「私たちが選んだ代表者が決める」という実際とのズレです。小キボな地方自治体であれば、住民自身の会合によつて地域の政策を決めることも不可能ではありません。日本の地方自治法では、議会と並んで住民総会が意思決定機関として規定されています。しかし、人口が数万人を超えれば、直接民主主義は不可能です。政治のままとまりにおけるルール作りは、代表者にゆだねられざるをえません。

現実の政治では、代表者が国民の意思とは無関係に、勝手に物事を決めることもめずらしくありません。選挙の際に、政治家や政党は一応公約を示しますが、それをすべて実現するとはかぎりませんし、選挙の時に約束していないことを決定することもあります。そうしたズレは、代表民主主義の宿命です。

だからこそ、選挙が重要な意味をもつのです。選挙の際には、政治家がそれまでの任期中におこなった事柄について、厳しく吟味し、代表としてふさわしいかどうかを考えなければなりません。国民が選挙に真剣に取り組めば、政治家もつねに国民の視線を意識して、行動するでしょう。つねに国民が政治家に対して何々をせよと具体的に指示することは不可能です。けれども、政治家が自分の判断や選択に関して、国民がどう考えるか、どう評価するかにつねに思いを致すように仕向けることこそ、代表民主主義を機能させるカギとなります。

(山口二郎『政治のしくみがわかる本』)

★為政者……政権をにぎって政治を行う人

★あずかり知らぬ……かわりを持たない

問一 A・B に入れるのにもつともふさわしい表現を、
は二字、 B は三字で本文から抜き出しなさい。

問二 線(1)「そもそも民主主義を支える市民には、自分たちにとつてどのようなルールが必要で役に立つかということを判断する能力がないではないかという批判」とありますが、この批判は妥当でないと筆者は述べています。その理由を、本文の表現を用いて九十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問三 C に入れるのにふさわしい表現を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 友人関係 イ 姉妹関係 ウ 夫婦関係 エ 親子関係

問四 線(2)「与えられた前提、自分の意志で選択できない」とありますが、これはどういうことですか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア 意味のないルールに対して人は従順でないということ。
イ 必要なルールは自分たち自身で考えればよいということ。
ウ 民主主義の理念と現実との間にはズレがあるということ。
エ 民主主義の考え方は選挙が重要な意味をもつということ。

問五 線(3)「与えられた前提」の奴隷」とありますが、そうならないためには、どうすることが必要だと筆者は述べていますか。本文の表現を用いて十五字以内で答えなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問六 線(4)「政治家が自分の判断や選択に関して、国民がどう考えるか、どう評価するかにつねに思いを致すように仕向けることこそ、代表民主主義を機能させる」とありますが、もし機能しない場合、どんな政治になりますか。本文の表現を用いて三十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問七 線(ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 民主主義の考え方が広まることによって、世界中から理不尽なルールがすべて撤廃された。
- イ どんなに有能な人が為政者となっても、いつも正しい判断ができるとは限らないものである。
- ウ 民主主義を支える市民には正しい判断をする能力がないので、代
表民主主義の考え方が生まれた。
- エ 直接民主主義で重要なのは、選挙のときに国民が政治家へ具体的な指示をすることである。

② 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

学校はたのしかった。自分がきちんと学校に通って、授業に参加しているんだ、というあたりまえのことを誇らしく思った。もちろん、それは押野のおかげだった。何しろ、去年までは一日の間にクラスメイトのだけれども一度も話さなかったときだって少なからずあったのだから。

飼育委員になって、「しまった」と思ったのは、教室で飼う生き物を決めなくてはならないからで、それが今回の学級会の議題だった。

飼育委員は四人いて、ほく以外は女子一人に男子が二人。女子は亀山さんというちょっと変わった女の子で、自分の名前にちなんでどうしても亀を飼いたいらしい。あとの二人は、なんていうのか、ほくとほまたちがったおとなしい感じの男子でも仲がいい。二人一組っていう感じでいつもいっしょにいる。見た目も、髪型やメガネの感じなんかがよく似ている。

昨日、飼育委員四人を集めて、「事前に飼育委員で相談しておくように」と、椎野先生が言ったというのに、だれ一人として相談をしようという気がない。ほく以外の二人の男子は、何やらひそひそと相談しているみたいだけ。

彼らに任せておけばいいか、とほくはちょっとだけ思った。でも、ほとんどの部分では、ちゃんと決めておかななくちゃ、とあせていた。だって、椎野先生と押野に迷惑がかかってしまうから。でも、なかなか言い出せなかった。だれかが声をかけてくれればいいのになと思いつながら、ほくは待っていた。今までは、ほくが行動に移す前には、すべてのことがきちんと決まっていた、決まったことをあとからきくというパターンだった。けれど、⁽¹⁾ 今回のメンバーは期待できそうになかった。

なんとなく、彼らの目線を感じる。でも、こっちから声をかけることができる。亀山さんにも目線を何度も送っているけど、絶対気づいているはずなのに無視している。どうしよう。学級会は五時間目だから、それまでになんとかしなくちゃいけない。

頭の中でもやもやと考えてるだけで、時間はどんどん過ぎ、あつという間に昼休みになってしまった。

「ねえ、ちょっと！」

突然、亀山さんに声をかけられてびっくりした。

「亀に決めたから！」

30

25

20

15

10

5

「……え、亀？ 亀だけ？」

「そう。亀にだっていろんな種類がいるんだから、いいでしょ！」
「そんな……、と思ったけど、反論のしようがなかった。」

「あ、あとの二人は？」

「よくわかんない。えだいちからきいておいてよ。みんなちつとも決めないんだから。とりあえず亀で決まりだから！」

時間は刻一刻と迫っている。振り返って二人を見ると、ほくのことをじつと見ている。ほくは仕方なく、すぐごと彼らのところへ行った。

「亀山さんが、亀って言うてるけど、それで決まりでいいのかな」

二人は顔を見合わせるだけで、何も答えない。
「どう？」

何度目かの同じ質問に、

「家で熱帯魚とかいろいろ飼ってるから、べつにそんななんでもいい」と片方が言った。そして二人で目配せしあって、いやな感じで笑った。

「べつになんでもいい」

もう片方も、同じような調子でそう言った。正直ほくはむかつとした。
⁽²⁾ これじゃあ、亀山さんのほうがよっぽどました。

「わかったよ」

ほくは二人に背を向けた。眉間のあたりや⁽³⁾ 耳のあたりが、かあつと熱かった。いいかげんすぎるじゃないか、と思った。二人でにやにや笑ったりしていやな感じだ。こめかみがじんじんとした。⁽⁴⁾ これが怒ることだ。気分がいいのではけつしてないことが、はじめてよくわかった。

五時間目はすぐにやってきて、学級会がはじまった。そして、椎野先生が、

「まず飼育委員の人たちが決めたものを発表してください」と言った。

ちらつとあの二人を見ると、下を向いている。ほくはまたむかつときたけど、深呼吸をしたらだいたいぶ収まった。亀山さんに目をやると、すましたままだ。だれも発表する気がないらしい。

「ほら、飼育委員！」

椎野先生にパンツと手をたたかれて、ほくは思わず立ち上がった。立った自分にびっくりした。クラスメイトのみんなもびっくりしていたにちがいない。五年生になって、押野にからかわれたりして、多少はみんなから注目を浴びることもあったけど、それは本当に時々って感じで、ふだんの

60

55

50

45

40

35

ぼくは、相変わらずのさえない男の子だったから。

「はい、じゃあ、枝田くん発表してください」

椎野先生はいつもの笑顔にさらにうれしさが加わったような顔をしていった。やさしい親戚のおばさんみたいで、ぼくはちよつとだけうれしく思った。

「ぼくたち飼育委員が決めた、クラスで飼う生き物の候補を発表します」

ぼくはみんなのほうを向いて、ひと呼吸したあと大きな声で言った。

「ひとつめは亀です。亀といってもいろいろな種類の亀がいますが、飼いやすいのはミドリガメやゼニガメだと思います。小さくてとてもかわいいです」

言葉はすらすらと出てきた。

「それと、ぼくの意見ですが、グッピーやネオンテトラなどの熱帯魚を飼いたいと思います。赤ちゃんを産ませて育てたいからです。あと、淡水魚だったら、あやめ川でつれる鮒とかハヤなんかもいいと思います」

教室がしんとなった。自分でも驚いた。こんなふうに関心を持って、頭の中で思っていたとおりに、みんなの前でしゃべることができるとは。ぼくは、大きく息を吐いてから静かに席に座った。母さんが買ってくれた水辺の生き物図鑑と熱帯魚図鑑はぼくの愛読書だ。

(5)「お、おいおい、なんだよ。すげーな、今日のえだいちほ」

と、押野がおどけて沈黙を破つたと同時に、空気がはじけてみんなが笑った。椎野先生はまっすぐにぼくを見ていた。亀山さんのほうを見たら、ピースで返してくれた。

学級会では、その後いろいろな意見が出たけど、五年二組で飼育するのは、結局グッピーとなった。ぼくはうれしかったけど、亀山さんには申し訳ないような気がした。

「ごめんね。亀飼えなくて」

あとで亀山さんに言ったら、亀山さんは「気にしないで」と言ってくれた。

「私、グッピーも好きだから。いっぱい増やしたいよね」と。ぼくは大きくうなずいた。

ぼくたち飼育委員は、椎野先生といっしょに、近所の熱帯魚屋さんに行つて、グッピーをつがいで六匹買った。本物のグッピーは、図鑑で見るとよりもっともつときれいで、思ったよりも小さかった。

95

90

85

80

75

70

65

水槽をきれいに洗って、酸素ポンプを取りつけた。学級会るときはちよつとむかついたけど、家で熱帯魚を飼っているという二人だけあって、手際よく準備してくれた。ぼくは、お礼を言った。二人も「ありがとう」と言ってくれた。(6) さっき怒っていた自分はずかしくなった。

四人で、これからの飼育日誌のつけ方や、エサのやり方を相談した。三丁目の空き地で野球をする連中とはまたちがった感覚で、友達にはいろいろな種類があるんだなあ、と漠然と思った。

五月末の遠足では、くじ引きで決めた班で行動した。押野とも飼育委員の連中とも同じ班ではなかったけど、リュックを背負つての山歩きはたのしかった。椎野先生に見つかり怒られるまで、ぼくたちの班ではジャンケンをして、負けたほうが、勝った人の荷物を持つというゲームをして歩いた。このときのぼくには、ジャンケンの神様がつかっていたのか、一回も負けることなくかなりの距離を歩けた。

「転倒したらどうするの！ 山道は危険なんだから絶対にやめなさい。両手をさちんとあけておかないとだめよ」

椎野先生は、山登りが趣味だということ、子どもがかんたんに登れるような山でも、完全装備だった。いつものふくらはぎまでのずんぐりしたスカートをはいている椎野先生よりも、もつとずっと若く見えた。

「先生、その帽子似合ってるよ」と、黄色い羽のついている帽子を見て、班のだれかが言った。

五年生になって、押野をきっかけに、ぼくは自分でも変わったと思う。今まで知らなかったことが、いきなりたくさんあふれ出てきて、ぼくはそれらを急速に吸収した。野球、友達、飼育委員、抹茶プリン、怒ること、笑うこと。

(7) 母さんとぼくの二人だけの世界から、急に景色は広がっていった。

(椰月美智子『しずかな日々』)

120

115

110

105

100

問一

——線(1)「今回のメンバーは期待できそうになかった。」とありますが、期待できないのはなぜですか。その理由としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 椎野先生や押野が選んだメンバーであるのにもかかわらず、動物の飼育に対する関心があったくなく何をしていいのかわからないようだから。

イ 自分の意見にこだわり、人の意見を聞こうとしない人ばかりで、クラスで何を飼育するのがいいのかわからないことを考えていないから。

ウ 飼育係の中であらかじめ相談して決めるようにと椎野先生に言われたのに、相談することを進んで切り出す人がいそいそもないから。

エ 自分の意見をはっきりと口に出して言う人が一人もいないので、他のメンバーが何を考えているのかわからないから。

問二

——線(2)「これじゃあ、亀山さんのほうがよっぽどましだ。」とありますが、何がまじったのですか。二十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問三

——線(3)「耳」とありますが、「耳」を使った次の一～五の慣用句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

一 耳が痛い

二 耳につく

三 耳を貸す

四 耳を傾ける

五 耳を澄ます

【意味】

ア 音や声がうるさく感じる。

イ 心を落ちつけて集中して聞く。

ウ 人の話を聞こうとする。

エ 聞きもらさないように注意して熱心に聞く。

オ 悪いところをつかれて聞くのがつらい。

問四

——線(4)「これが怒るってことだ。気分がいいのではけっしてないことが、はじめてよくわかった。」とありますが、この部分の説明として、もっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」はいままで怒りを感じないように自分の気持ちを無理に押し殺してきたが、今回のあまりにひどいうちには我慢ができなかった。

イ 「ぼく」はいままでいろいろなことを我慢してきたが、自主性のない人だけは我慢することができないので、自分ではどうすることもできず怒ってしまった。

ウ 「ぼく」はいままで友達と話すことさえできなかったが、最近学校に来ることもできるようになり、その中で怒るという機会にめぐり合った。

エ 「ぼく」はとてもおとなしい性格であったが、まわりの友人がとても冷たく接するので、いつのまにか性格が変わり怒りっぽくなった。

問五

——線(5)「お、おいおい、なんだよ。すげーな、今日のえだいち」があります。押野がこのように驚いたのはなぜですか。四十五字以内で具体的に説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問六

——線(6)「さっき怒っていた自分はずかしくなった。」とありますが、自分がどうしたことをはずかしく思ったのですか。三十字以内で説明しなさい。(句読点も含み、必ず一マスを用いること)

問七

——線(7)「母さんとぼくの二人だけの世界から、急に景色は広がっていった。」とありますが、この表現の説明としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア これまで「ぼく」はお母さんと二人だけで生活してきたが、今の学校に転校したことをきっかけとして、たくさんの友だちができ、その結果いろいろな経験をすることができるようになった。

イ いままでは「ぼく」の生活をともにするのはお母さんだけであったが、押野との出会いをきっかけとして、いろいろな人を知り、さまざまな体験をとおして自分の世界を広げることができた。

ウ 「ぼく」はお母さんとの暮らしの中ではいつも同じような風景の中で生活してきたが、いろいろな人と付き合うなかでさまざまなところへ行き、今まで見たことがない景色を見ることができた。

エ お母さんの愛情に守られて限られた世界で過ごしてきた「ぼく」であったが、このところ思いがけない出来事が続いて、いままでは知らなかったことをたくさん見聞きすることになった。

問八

本文の内容に合うものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」が飼育委員になったのは、教室で飼う生き物を何にするのかを決めることに興味を持っていたからであったが、初めのうち他のメンバーにはやる気が感じられなかった。

イ 「ぼく」にとって押野は学校のなかでたった一人だけ信頼できる人であり、彼の前だけでは自分の気持ちを述べることができる大切な友だちである。

ウ 亀山さんは自分の意見しか言わないわがままなクラスメイトであったが、「ぼく」が一生懸命に説明することによって気持ちを入れ替えて明るく接するようにならった。

エ クラスメイトの前で自分の意見をはっきりと述べることができるようになったことを、椎野先生は心から喜んでくれていると「ぼく」は感じている。